



学校だより No.6

響き合う

令和2年5月29日
大村市立放虎原小学校
文責 香田 公裕

当たり前のことを心を込めて！（新たな日常）

授業開始時に「お願いします！」、授業終わりには「ありがとうございました！」このあいさつを、桜が原中学校区の学校では、日直の号令と同時にいきます。また、朝からは「おはようございます！」帰りには「さようなら！」給食を食べる前に「いただきます！」食後に「ごちそうさまでした！」そう言います。それが当たり前の日常です。

ところが、最近（特に学校再開後）は、ただ単に言わなければならないから言う、中には、言葉すら発しない子どももいる。これらの言葉が、形式的になっている現状をよく見かけようになりました。何（誰に）をお願いしますなのか・・・なぜ、いただきますと言うのか・・・「進んであいさつみんなの心は 桜色」が、桜が原中学校区のキャッチフレーズですが、心は桜色になっているのか・・・。

先日、渡辺和子さん（元ノートルダム清心女学園理事長 「置かれた場所で咲きなさい」著者 故人）の著書を読んでいました。その中で、相田みつをさんの言葉を引用しながら、「**当たり前のことを 心を込めておこなう**」ことが大切だと語られているのが心に残りました。

学校再開後の新たな日常は、前号でもお知らせしたとおり、ソーシャルディスタンスに心がけ3密を防ぎ、マスクを着用するなど、人と人との物理的な距離をとりながらの生活です。子どもたちの健康安全を守るためには、とても重要なことです。しかし、今まで、表情を見たり、ふれあったりすることで得られた、心の交流が希薄になってくることが予想されます。上述のように日常が、形だけで無味乾燥なものになることが危惧されるのです。

（右上に続く）



（左下より） そこで、一つ一つの言動を大切に、相手意識を持ち、その意味や意義を考えながら生活させたいと思います。例えば、授業前の「お願いします」は、教えてくれる（支えてくれる）先生や友達・教科書や教材に対して、子どもたちは、しっかり学びますという覚悟を込めて言うことが大切です。一方、教師は、子どもたちに、学習内容を十分に理解させると共に、活用する力を身につけさせる覚悟と意気込みをもって発することが肝要だと思えます。

また、帰りのあいさつでは、「さようなら」の言葉が終わらないうちに教室を飛び出す子どもがいます。相手の目を見て、頭を下げ、またしっかり目を見て、笑顔でさようなら・・・この間と笑顔のやりとりが、今日の充実感となり、下校時の安全にもつながります。

「当たり前のことを 心を込めておこなう」ことで、心的な距離を近づけ、潤いのある学校生活を実現していきたい。それが、放虎原小がめざす新たな日常です。

今年の4月は、感染拡大防止対策で、校庭の桜を十分に堪能できませんでしたが、笑顔であいさつを交わすことで、“心に満開の桜を咲かせたい”そう思います。



感謝と少しばかりのお願い

学校再開にあたり、保護者の皆様には、マスクの着用や毎日の健康観察・検温の実施、具合が悪くなったらすぐにお迎えに来ていただくなど、全面的な協力をいただき、心より感謝申し上げます。マスク着用は、ほぼ全員できていて登下校時も着用するのが日常になってきました。また、最近では、中学生も着用するようになり、感心しているところです。

一方で、登下校に際し、自家用車による送迎が多くなったと感じています。昨年度もお願いしましたが、放虎原小学校の周りの道路は、大変狭いにもかかわらず、多くの車や自転車、歩行者が行き交う道です。中には、横断歩道近くに停車する車もいます。雨の日に、本校の駐車場や放虎原こども園の駐車場に乗りいれる車もいます。歩いてくる子どもにとって、とても危険な状況をつくっていることをかんがえていただきたいと思えます。